

第183回くらしの植物苑観察会 2014年6月28日(土)

## 「梅雨を彩る華花」

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

麦から稲へ

五月雨(さみだれ)月は旧暦の五月にあたります。今の暦では6月から7月の梅雨の時期になるのです。二十四節気では芒種(ぼうしゅ)から大暑の始まりころまでが梅雨の時期にあたります。梅雨は中国での言い方で、日本では古くから五月雨月と言ってきたわけですから、五月雨と梅雨の時期が一致して当然です。日本では、南西から北東へ移動する前線に太平洋側からの湿気が付加して重い雨雲となり、長く停滞すると、長雨・大雨を各地にもたらし、ときには洪水など水害を引き起こします。例年だと梅雨の終盤に集中豪雨・洪水に見舞われるのですが、今年は梅雨入りからすでに前線が猛威をふるっています。

戦後の高度成長の過程で二毛作をする農家は激減していきましたが、1960年代ではまだ、麦畑から稲田への移行が5月の終わりころに見られたものでした。麦秋から田植えを済ませた瑞々しい水田への移行が五月雨月への移行だったわけです。今日、稲も早生になってしまったので、こうした光景は見られなくなりましたが、五月雨月への移行は農事暦とも深く関係していたのです。二十四節気の芒種(ぼうしゅ)、今年は6月6日でしたが、この節気は麦を収穫した後、稲の種まきを始めることを意味していました。まだ稲の背丈が低い水田は、雨脚の音と蛙の鳴き声が協奏する水辺でもあったのです。

五月雨すなわち梅雨の時期は、本州中部での季節区分では六つの季節(四季ではなく六季)のなかで秋霖(シュウリン)とともに雨が多い季節にあたります。本州中部では、春、梅雨、盛夏、秋霖、秋、冬というように、雨が少ない季節と雨が多い季節が交互に訪れるのです。この季節を彩る華花には、紫陽花(アジサイ)、百合(ユリ)の仲間を挙げることができます。とくに紫陽花は梅雨の華花の代表格といえるでしょう。稲のようなありふれた植物のほかに、毒溜(ドクダミ)や半夏生(ハンゲショウ)といった植物もみられるのです。けっして華々しい花を咲かせてくれるわけではありませんが、日本人にはなじみ深い華花なのです。

毒溜と半夏生

ドクダミを毒溜と書いたのは深津正説によるのですが、臭いのきつい植物が掃き溜めたように群生するありさまを表現したものです。ドクダミの葉や茎をちぎってみるとものすごい臭いがします。「十薬のむしりたる手を洗ふかな」(加藤覚範)の句はまさにその特徴を如実に表しています。湿った日陰に群生することが多く、陰湿なところならどこにでも見かけることができるありふれた植物ですが、葉がハート形をしているのと、

真っ白な総苞片に支えられたブラシ状の花序は特異なもので、どことなく奥ゆかしさを感じずにはいられません。「梅雨降りてしめりがちな草むらに毒だみの花ま白なるかも」(高田浪吉)という歌もその生態をよくものがたっています。

ドクダミは十薬(じゅうやく)とも呼ばれたりしますが、これは十種の薬を馬に与えたのに匹敵するほどの薬効があることに由来すると考えられています。葉と茎を乾燥したものは、水虫退治や血管強化、利尿剤などに用いられる民間薬としても親しまれ、最近ではどくだみ茶として復活しつつあるようです。どくだみ、じゅうやく、しぶきのほか、じごくそば、しびとばな、どくなべ、へびころしなど、その名前は多様であり、日本の各地で古くから人々の生活に深くかかわってきたことは確かなようです。

一方のハンゲショウは、一般には半夏生と書かれますが、半化粧と書かれたりもします。今年の半夏生は夏至から11日目の7月2日、このころに花序に近い上部の葉二、三枚が白くなるので半夏生と呼ばれるようになったとの説があります。しかし、かたしろぐさ、みつじろぐさ、おしろいかげなどの各地の俗称からすると、やはり白粉で化粧したという意味の半化粧のほうがすっきりするようです。半化粧するまでに田植えを終えるようにとかつては言われたのでした。これも農事暦にかかわっているのです。そしてまた、葉や茎は胃腸病などの治療に民間薬として古くから用いられてきたのです。

ところで、ドクダミとハンゲショウは一見かけ離れた植物に見えますが、花には花弁もがくもないという共通点があり、葉や茎をちぎると独特の臭いを発するという点までが似ているのです。たくさんの共通点をもつ両者はともにドクダミ科に属していて、近縁であることがわかっています。さらにおもしろいことに、ドクダミ属はドクダミ1種しかなく、東アジアにしか分布しませんが、ハンゲショウ属は北米とアジアにそれぞれ1種ずつ計2種が含まれるだけで、そのうちの1種ハンゲショウは東アジアから東南アジアにしか分布しないのです。すなわち、日本は、梅雨を彩る植物としてドクダミもハンゲショウも見ることができる、世界でも類まれな地域なのです。日本人には親しみ深いそれら2種が、ともに揃って見られるのは日本くらいのものなのです。このような現象は、かつて地球が温暖な気候であったころに北半球の高緯度まで広く分布していたブナ属やカエデ属、メタセコイアなどのヒノキ科の仲間などに共通してみることができます。それらは周北極第三紀植物群と呼ばれていて、地球が寒冷な気候に見舞われるようになると、東アジアと北米に分断され、温帯で雨が比較的多い地域に生き残ったと考えられているのです。日本には台風が、北米東部にはハリケーンが襲い掛かってくるように、中緯度の温帯域で雨が多く、気候的にはとても似たところなのです。雨が多いことで特徴づけられる梅雨という季節は、世界的にみてもめずらしいものです。陰湿な場所に生育するドクダミとハンゲショウがともにこの季節に開花することもこの日本においては象徴的なことなのです。

.....  
**次回予告** 第184回くらしの植物苑観察会 2014年7月26日(土)

本館企画展示「弥生ってなに!」関連「コメと水」 西谷 大(当館考古研究系 教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要